



Title	方丈記の数値表現の一考察 家屋の大きさを中心に
Author(s)	勝俣, 隆
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 50, pp.二九-三九; 1995
Issue Date	1995-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/33326
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T14:12:19Z

方丈記の数値表現の一考察
——家屋の大きさを中心に——

勝 俣 隆

On the DESCRIPTION of NUMBERS in HOJYOKI,
ESPECIALLY on the LARGENESS of TYOMEI'S HOUSE

Takashi KATSUMATA

方丈記の後半、方丈の庵を結ぶ場面で、庵の大きさについて、次のような描写がある。

コ、ニ、六十ノ露消エガタニ及ビテ、更ニ末葉ノヤドリヲ結
ベル事アリ。イハバ、旅人ノ一夜ノ宿ヲツクリ、老イタル蚕ノ
繭ヲイトナムガゴトシ。是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又百分ガ
一二及バズ。

この中で、「是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又百分ガ一二及バズ。」とある部分は、以前から、その意味が不明で疑問であるとされてきた。それは、一つには、「中ゴロノ栖」が何を指すのか諸説あること。また、「又百分ガ一二及バズ。」をどう解釈するのかについて、意見が分かれているからである。

それぞれの点について、現在までの主な説を挙げると次のように

なる。

A、「中ゴロノ栖」が何を指すのかという点について。

- ① 祖母から相続し、三十歳程まで住んだ大きな家。
- ② 鴨川の湖畔の家で、①の十分の一の大きさの家。
- ③ 大原の家。

B、「百分ガ一二及バズ。」をどう解釈するのかという点について。

- ① 祖母から相続した家の百分の一にも及ばないとするもの。
- ② 鴨川の河畔の家の百分の一にも及ばないとするもの。
- ③ 大原の家の百分の一にも及ばないとするもの。
- ④ 単に小さくなったことを印象的に言ったもので、大きさは意味がないとするもの。

まず、Aであるが、③の「大原の家」というのは、時期的にも、

また、想像される家の大きさから考えても、成り立ちにくい考えであると推測されよう。

それ故、①か②ということになるが、どちらが適当であろうか。まず、「なかごころ」という言葉の意味であるが、時代でいえば、「あまり遠くない昔」、人で言えば、「一生の中期の頃、中年」を指す言葉のようである。今、鴨長明が方丈記を執筆したのが、五十七歳頃とすれば、三十〜四十歳頃となろう。そうすれば、①では、早すぎるから、②の鴨川の河畔の家を指すということになろう。

実際、これは、諸注釈書では、一番多い見方である。また、「なかごころ」という言葉の解釈から言っても、最も自然な見方と思われる。

ところが、この考えに立った場合、Bの方はどのように理解すべきであろうか。素直に考えれば、②の説を採るべきであろう。しかしながら、仮に②を採るとすると新たな問題が出てくる。

既に多くの人が指摘しているように、方丈の家が、②の鴨川の家百分の一であれば、鴨川の家が十分の一の大きさしかないと描かれた祖母から相続した家は、方丈の家の千倍もなることになり、途方もない大きさになってしまうからだ。

例えば、神田秀夫氏は、次のように述べておられる。²⁾

これは、例の長明の大きさで、もし、言葉どおりにとつたら、方丈即ち一間半四方の建坪は、二・二五坪だから、その百倍は二二五坪、更に

是ヲアリススマヒニナラフルニ、十分カ一也。

を信じて、十倍すると、「祖母ノ家」の建坪は二二五〇坪、四五〇〇畳敷ける勘定になる。

そこで、どう考えても尋常ではない大きさを説明するために、様々な考えが行われた。

神田秀夫氏は続けて、次のように説かれる。²⁾

恐らく、これは、「なかごころのすみか」の十分の一が方丈なので、百分の一は「祖母の家」の百分の一なのだろう。その「祖母の家」に執念が残っているものだから「百分が一」と、つい、書いてしまったのだろう。

神田氏は、「なかごころのすみか」は、鴨川河畔の家とし、ただ、「百分が一」というのは、鴨川河畔の家ではなく、祖母の家の百分の一であるとする。

一方、築瀬一雄氏は、『方丈記全注釈』の中で、次のように述べておられる。³⁾

先に「十分が一」、ここに「百分が一」と言ったのは、自分の家がだんだんに小さくなるということを、印象的に述べたのであって、この比を以て、祖母から伝領した家の広さを計算するなどは、全く意味がない。

神田秀夫氏は、鴨長明が、祖母の家に執念を持っていたので、思わず知らず、祖母の家を基準にした数値が出てきたのだとされ、築瀬一雄氏は、大きさを印象的に述べたに過ぎず、数値にこだわる必要はないとされた。

この二つの考えが、現在、当該部分に関する有力な解釈と言えよう。どちらの説も、一応納得できる。しかしながら、この部分の解釈は、この二つの説以外に別の解釈は成り立たないであろうか。単なる筆の誤りに過ぎないのであるか。また、単に印象を述べたものであると言い切れるであろうか。こちら二説以外の解釈を行う余

地は残されていないだろうか。

そこで、次に、方丈記の中で、数値はどのように描かれているのか、それを見てみることにする。

二、方丈記の数値表現

方丈記に出てくる数値を最初から順に挙げてみたい。¹⁾

- (1) イニシへ見シ人ハ、二三十人中ニワツカニ一人・二人ナリ。
- (2) 予、モノノ心ヲ知レリシヨリ、四十アマリノ春秋ヲ送レルアヒダニ、世ノ不思議ヲ見ル事、ヤ、タビくニナリヌ。
- (3) 去安元三年四月廿八日カトヨ。
- (4) 果テニハ、朱雀門・大極殿・大学寮・民部省ナドマデ移リテ、一夜ノウチニ塵灰トナリニキ。
- (5) 空ニハ灰ヲ吹キタテタレバ、火ノヒカリニ映ジテアマネク紅ナル中ニ、風ニ堪エズ吹キ切ラレタル焰、飛ガ如クシテ一二町ヲコエツ、移リユク。
- (6) 七珍万宝サナガラ灰燼トナリニキ。
- (7) 其ノタビ、公卿ノ家一六焼ケタリ。
- (8) 惣テ、都ノウチ三分ガ一二及ベリトゾ。
- (9) 男女死ヌルモノ數十人。
- (10) 又、治承四年卯月ノコロ、中御門京極ノホドヨリ、大キナル辻風発リテ、
- (11) 大キナル辻風発リテ、六条ワタリマデ吹ケル事ハベリキ。
- (12) 三四町ヲ吹キマクルアヒダニ籠レル家ドモ、大キナルモ小

サキモ、

- (13) 籠レル家ドモ、大キナルモ小サキモ、ヒトツトシテ破レザルハナシ。
- (14) 門ヲ吹キハナチテ、四五町ガホカニ置キ、
- (15) 垣ヲ吹キハラヒテ、隣トヒトツニナセリ。
- (16) 又、治承四年ミナ月ノ比、ニハカニ都遷リ侍キ。
- (17) ヲホカタ、此ノ京ノハジメヲ聞ケル事ハ、嵯峨ノ天皇ノ御時都ト定マリニケルヨリノチ、ステニ四百余歳ヲ経タリ。
- (18) 世ニ仕フルホドノ人、誰カ一人フルサトニ残り居ラム。
- (19) 官位ニ思フカケ、主君ノカゲヲ頼ムホドノ人ハ、一日ナリトモ疾クウツロハムト励ミ、
- (20) 二年ガアヒダ世中飢渴シテ、アサマシキ事侍リキ。
- (21) 或ハ春・夏ヒデリ、或ハ秋大風・洪水ナド、ヨカラヌ事ドモウチ続キテ、五穀事くク生ラズ。
- (22) 一人ガ持チテ出デタル価、
- (23) 一日ガ命ニダニ不及トゾ。
- (24) 人数ヲ知ラムトテ、四五両月ヲ計ヘタリケレバ、
- (25) 京ノウチ、一条ヨリハ南、
- (26) 九条ヨリ北、
- (27) 路ノホトリナル頭、スベテ四万二千三百余ナンアリケル。
- (28) イカニイハムヤ七道諸国ヲヤ。
- (29) 堂舎・塔廟ヒトツトシテ全カラズ。
- (30) 世ノ常驚クホドノ地震、二十三度振ラヌ日ハナシ。
- (31) 十日廿日過ギニシカバ、ヤウく間遠ニナリテ、
- (32) 或ハ四五度、

- (33) ……三三度、
- (34) 若ハ一日マゼ、
- (35) 二三日ニ一度ナド
- (36) ヲホカタソノ余波三月バカリヤ侍リケム。
- (37) 四大種ノナカニ水・火・風ハツネニ害ヲナセド、…
- (38) 三十余ニシテ…
- (39) ……ワガ心ト、一ノ菴ヲ結ブ。
- (40) 是ヲアリシ住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。
- (41) スベテ、アラレヌ世ヲ念ジ過グシツ、心ヲナヤマセル事、三十余年也。
- (42) スナハチ、五十ノ春ヲ迎ヘテ、家ヲ出テ世ヲ背ケリ。
- (43) ムナシク大原山ノ雲ニ臥シテ、又五カヘリノ春秋ヲナン經ニケル。
- (44) コヽニ、六十ノ露消エガタニ及ビテ、更ニ末葉ノヤドリヲ結ベル事アリ。
- (45) イハバ、旅人ノ一夜ノ宿ヲツクリ、…
- (46) 是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又百分ガ一二及バズ。
- (47) 広サハワジカニ方丈、高サハ七尺ガウチ也。
- (48) 積ムトコロ僅カニ二両、車ノチカラヲ報フ外ニハ、サラニ他ノ用途イラズ。
- (49) ……東に三尺余ノ庇ヲサシテ、柴折りクブルヨスガトス。
- (50) 西南ニ竹ノ釣棚ヲカマヘテ、クロキ皮籠三合ヲ置ケリ。
- (51) カタハラニ琴・琵琶各一張ヲ立ツ。
- (52) 又、フモトニ一ノ柴ノ菴アリ。
- (53) カレハ十歳、…

- (54) ……コレハ六十、
 - (55) ヲホカタ、コノ所ニ住ミハジメシ時ハ、アカラサマト思ヒシカドモ、今スデニ、五年ヲ経タリ。
 - (56) 一身ヲヤドスニ不足ナシ。
 - (57) 今、一身ヲ分チテ、…
 - (58) ……二ノ用ヲナス。
 - (59) 只、ワガ身ヒトツニトリテ、昔・今トナゾラフルバカリナリ。
 - (60) 夫、三界ハ只心ヒトツナリ。
 - (61) 心若安カラズハ、象馬・七珍モヨシナク、
 - (62) 今、サビシキ住マヒ、一間ノ菴、ミヅカラコレヲ愛ス。
 - (63) 抑、一期の月影カタブキテ、余算ノ山ノ端ニ近シ。
 - (64) タチマチニ三途ノ閻ニ向カハムトス。
 - (65) 不請阿弥陀仏両三遍申テ已ミス。
 - (66) 建曆二年、…
- 以上の用例から判断されること、次の通りである。
- ①鴨長明は、数字をかなり厳密な数値として使用していること。
 - ②使われている数字は、人数・日数・月数・年数・個数・序数・尺度・回数・分数・年齢・熟語(慣用句)に分けられること。
 - ③全文で原稿用紙二十枚ほどの『方丈記』の分量からすれば、数値の描写の占める割合は大きいと言えること。
 - ④使われている数字は、具体的には、次の通りである。
- | | | | | |
|--------|-----|----|----|---|
| (1) …… | 一人 | …… | 二例 | ☆ |
| | 一日 | …… | 三例 | ☆ |
| | ヒトツ | …… | 六例 | ☆ |

(6) 三	(5) 一度 二・三 二・三	(4) 二・三	(3) 二	(2) 二	
三途 三界 三合 三尺 三月 三年	二三日 に一度	二 三 度 二 三 遍	二 兩 二 年	二 町 人 二 人	一 条 一 期 一 間 一 夜 一 張 一 身
・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
一 例	一 例	一 例	一 例	一 例	一 例
★	☆	☆	☆	☆	★
計 六 例	計 一 例	計 二 例	計 四 例 (注5)	計 二 例	計 一 九 例

(17) 十・廿	(16) 十分方一	(15) 十	(14) 九	(13) 七	(12) 六	(11) 五	(10) 四・五	(9) 四	(8) 三・四	(7) 三分方一
十 日 廿 日	十 分 方 一	十 歳	九 条	七 尺 七 道 七 珍	六 条	五 穀 五 カ ヘ リ ノ 春 秋 五 年	四 五 町 四 五 兩 月 四 五 度	四 月 四 年 四 大 種	三 四 町	三 分 方 一
・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
一 例	一 例	一 例	一 例	一 例	一 例	一 例	一 例	一 例	一 例	一 例
☆	☆	☆	★	★	★	☆	☆	★	☆	☆
計 一 例	計 一 例	計 一 例	計 一 例	計 三 例	計 一 例	計 三 例	計 三 例	計 四 例	計 一 例	計 一 例

- (18) 十六 ……一例 ☆ 計一例
- (19) 三十三
 { 三十人 ……一例 ☆
 { 三十度 ……一例 ☆ 計一例
- (20) 廿八 ……一例 ☆ 計一例
- (21) 三十
 { 三十余 ……一例 ☆
 { 三十余年 ……一例 ☆ 計一例
- (22) 四十 ……一例 ☆ 計一例
- (23) 五十 ……一例 ☆ 計一例
- (24) 六十 ……二例 ☆ 計一例
- (25) 数十 ……一例 ☆ 計一例 (注6)
- (26) 百分が一 ……一例 ☆ 計一例
- (27) 四百 ……一例 ☆ 計一例
- (28) 万 ……一例 ★ 計一例
- (29) 四万二千 (四万二千三百余) ……一例 ☆ 計一例
- 三百
- 総計六九例 (七〇例)
- 以上の具体例から判断されることは、★印を付けた熟語・慣用句よりも、☆印を付けた実数の方が圧倒的に多いことである。これは、鴨長明の記した数字が、観念的なものであるよりも、具体的・経験的・実的な数字が多いことを示している。

また、それに関連するが、「一・二」「二・三」「三・四」「四・五」と連続した数字を並べて、表記することが極めて多い。これは、曖昧さを残した表記と見るよりも、より正確を期したために、断定を避けて、こうした表記がなされたと思われ、正しいのではないかとと思われる。地震の描写の部分、

世ノ常驚クホドノ地震、二三十度振ラヌ日ハナシ。十日廿日
 過ギニシカバ、ヤウく問遠ニナリテ、或ハ四五度、二三度、
 若ハ一日マゼ、二三日ニ一度ナド、オホカタソノ余波三月バカ
 リヤ侍リケム。

を見ると、その揺れ方が段々と納まっていく様子が、連続した数字を並べることで、極めて的確に、現実味を持って、描写されていることが分かる。断定を避けることで、却って、活き活きとした描写になっており、真実らしく伝わって来る。これは、『山傀記』の地震の記録と比べても、事実とそれほど離れていないようである。

また、①で述べたことと関連するが、鴨長明は、大体において、実際とかけ離れた数字は表記せず、彼自身が直接・間接に見聞した事実に基づき、かなり忠実に、数字を書き表わしているのではないかと思われる点が多い。

例えば、(7) 其ノタビ、公卿ノ家一六焼ケタリ。
 は、『玉葉』では、「十四」であるから、恐らく、その方が信憑性があるが、当時そうした言い伝えもあったのかもしれないから、一概に否定できない。それに、「十四」と「十六」は、咫尺の間にあると言っても良く、方丈記の記述が不正確だという証拠にはすぐにならない。

また、仁和寺の隆暁法印が、飢餓で亡くなった人の数を四五の二

カ月で数えたところ、「路ノホトリナル頭、スベテ四万二千三百余ナンアリケル。」という凄惨な状況であったという描写があるが、ここで、「四万二千三百余」という細かい描写をしたところに、実に鴨長明の長明らしい点が伺われ、その面目躍如と言えるのではないか。つまり、死者の数を「四万人」とか「数万人」とか概数で言うのではなく、百の単位まで細かく描写することで、現実味が増し、読者に飢餓の恐ろしさが印象づけられるのである。鴨長明は、そのあたりのことは、随分計算し尽くして、数字の描写を行っているように判断される。

これは、もっと単純な数字の場合も同様である。方丈の庵の描写に、次のような場面がある。

イマ、日野山ノ奥ニアトヲ隠シテノチ、東ニ三尺余ノ庇ヲサシテ、柴折リクブルヨスガトス。

ここで、庇の長さを「三尺余」と記しているのに注目したい。この部分は、単に「東ニ庇ヲサシテ」でも良いし、また、「東ニ三尺ノ庇ヲサシテ」という描写も可能はずである。ところが、敢えて「三尺余」と記したのは何故だろうか。単に「東ニ庇ヲサシテ」では、庇の大きさが分からないから、現実感がうすくなる。一方、「東ニ三尺ノ庇ヲサシテ」だと、「三尺」が強すぎて、物差しで計ったかの如き印象を与えてしまって、却って、真実味が乏しくなる恐れがある。そこで、現実の存在感を持たせるとともに、真実性も損なわれないように、「三尺余」という微妙な表現をしたのだと推測される。ほかの部分でも、数値に「余り」が付いている表現は、これと同じ効果を狙ったものと思われるのである。

このように、鴨長明は極めて、数値を巧みに使用して、表現効果

を高める術を熟知していた作家と言えよう。

さらに言えば、鴨長明は、数値、特に家の数値に関して、大きな関心を持っていたと言えるだろう。「方丈記」という題目にしてからが、家の大きさを直接に表わす表現である。数値を伴わない『池亭記』という題目と比較すれば、その違いは明白である。

冒頭部分からして、

或ハ大家ホロビテ小家トナル。

とあって、家を大きさの大小で捉えているのである。

これらのことから言えることは、鴨長明は、数値に関心を持つばかりでなく、数値を正確に表記するのに腐心した人、さらに言えば、物事を数値を通して正確に把握しようとする努力した人ではなかったかと思われるのである。

この点について、三木紀人氏は、興味深い指摘をされている。

ひるがえって『方丈記』を見直してみると、全体の構成の緊密さもさることながら、いささか偏執的にさえ感じられる対句仕立ての文章、過不足ない災害描写、すぐに凶面に翻訳できる草庵内外の記述、それ以前に、その庵を考案した独特な能力（後述するように長明には手作りの琵琶もあった）等々からは長明の器用さと、ほとんど幾何学的と呼びたくなる几帳面な資質とが浮かび上がる。

三木氏がここに述べた趣旨は、鴨長明の性格の特徴を極めて良く捉えたものだと思う。現代でいえば、数学者的素質が長明にはあり、数値に特別な関心を抱き、特に、家の大きさに関しては、幾何学的な正確さで把握する能力を備えていたように思われるのである。ところで、

果テニハ、朱雀門・大極殿・大学寮・民部省ナドマデ移リテ、
一夜ノウチニ塵灰トナリニキ。(安元三年の大火)

とか、

堂舎・塔廟ヒトツトシテ全カラズ。(元暦二年の大地震)

などという表現は、少し大げさではないかと言った印象もなくはない。

しかし、『百鍊抄』『玉葉』等の記述に拠れば、安元三年の大火で京都市中三分の一が、一夜のうちに灰塵に帰したのは真実と思われるし、元暦二年の大地震についても、『百鍊抄』に「一所として全からず。」とあるから、この大地震で、京都中の殆どの建物が倒壊したのも、また事実と見られる。

即ち、鴨長明の数値に関する描写は、多少の誇張はあるにせよ、かなり正確な描写が多いということが言えよう。

そこで、いよいよ、当該の家の大きさの比較の記事について考察してみたい。

三、家の大きさの比較の記事について

上述したように、鴨長明は、家の大きさにかなりの拘りを持っていたように見受けられる。

辻風の段で、

・三四町ヲ吹キマクルアヒダニ籠レル家ドモ、大キナルモ小サキモ、ヒトツトシテ破レザルハナシ。

とある部分も、家を大小で把握している点は、冒頭部の「大家ホロビテ小家トナル」と同様である。

そこで、当該の

是ヲ中ゴロノ栖ニ比レバ、又百分ガ一二及バズ。

という一節の意味について、検討したい。

これは、いわゆる分数の表記であるが、同様のものは、次のような例が見られた。

①トコロモ変ラズ人多カレド、イニシヘ見シ人ハ、二三十人ガ中ニワツカニ一人・二人ナリ。

②惣テ、都ノウチ三分ガ一二及ベリトゾ。

③二三日ニ一度ナド、ヲホカタソノ余波三月バカリヤ侍リケム。

④是ヲアリシ住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。

これを見て気づくことは、鴨長明は、こうした分数的言い回しをかなり好んだのではないかということである。

そして、②の「都ノウチ三分ガ一」という表現が、『玉葉』等の当時の記録から判断して、ほぼ正確であることから考えても、④の「是ヲアリシ住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。」というのも、勿論実測したりした上でないにしても、全くの印象だけではなく、それなりの客観的な比較に基づく数値である可能性は十分存在しよう。

つまり、今まで見てきた他の数値と比べれば、「十分ガ一也」と言っているのが、実際は「二十分の一」であったり、「五分の一」であったりするほど、いい加減な数値ではないのでないかということである。それ故、当該の「百分ガ一」も、これが、「二百分の一」とか、「五十分の一」とかいう程の隔たりはない範囲の数値ではなからうかと思われる。

もし、この推測が正しければ、築瀬一雄氏の如く、「自分の家がだんだんに小さくなるということ」を、印象的に述べた」だけとも、

必ずしも言えなくなるのではなからうか。

その場合、「十分ガ一」「百分ガ一」という表現が、実際の家の大きさをある程度反映しているとしたら、当該部分は、いかに解釈すべきであろうか。

当該の「是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又百分ガ一二及バズ。」という描写が、「是ヲアリシ住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。」という前出の一文に対して綴られたものであることは、築瀬一雄氏等が既に指摘された通りであろう。

そこで、この二つの文をさらに詳しく検討してみたい。二つを並べると、次のようになる。

①是ヲアリシ住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。

②是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又百分ガ一二及バズ。

両者の文の類似は、②が①を意識して書かれた文であることを如実に示しているよう。

①の「是」は「鴨川近くの家」を表わし、「アリシ住マヒ」は、「父方の祖母の家」を示していることに異論はないであろう。次に②の「是」が「方丈の庵」を表わすことにも異論はなからう。問題は、②の「中ゴロノ栖」であるが、これが、①の「是」即ち、「鴨川近くの家」を表わすことは、「中ゴロ」という語の意味や、前後の文脈関係から導かれるところであろう。一番の問題は、「又百分ガ一二及バズ」とある、その意味である。

普通には、①で、「是」が「アリシ住マヒ」の「十分ガ一也」であれば、①と同様に、②の場合も、「是」が「中ゴロノ栖」の「又百分ガ一二及バズ。」ということ、②の「是」即ち「方丈の庵」は、①の「アリシ住マヒ」即ち「父方の祖母の家」の、「十分ガ一」

の、さらに「百分ガ一」、つまり「千分ガ一」に過ぎないという計算になってしまふことになる。これでは、あまりに途方もない数字なので、これを、築瀬一雄氏のように、「自分の家がだんだんに小さくなるということ、印象的に述べたのであって、祖母から伝領した家の広さを計算するなどは、全く意味がない。」と言う形で解決することも確かにできよう。しかし、上述したように、鴨長明の数値表現は、かなりの正確さを有し、単に「印象的に述べた」とは言い切れない面を持つこともまた確かである。それならば、当該部分は、どう理解すべきか。

既に紹介したように、「方丈の庵」が、「父方の祖母の家」の僅か千分の一に過ぎないというのは、常識的に判断して、「父方の祖母の家」が大きくなり過ぎて、考えにくい。すると、神田秀夫氏のよう

に、「なかごろのすみか」の十分の一が方丈なので、百分の一は「祖母の家」の百分の一なのだろう。

という考えが、大きさという点では、合理的な解釈と言えることにならう。ただ、神田秀夫氏は、

その「祖母の家」に執念が残っているものだから、「百分が一」と、つい、書いてしまったのだろう。

としているが、この考えで、十分な説明が付くであろうか。そこで、もう一度、当該の本文を点検してみたい。当該本文は、

是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又百分ガ一二及バズ。

とあった。ここで「又」に注目したい。この「又」は、①の「是ヲアリシ住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。」に対して「又」という語が登場しているのだと理解できよう。つまり、「中ゴロノ栖ニ比

ブレバ」という意味は、単に、「方丈の庵」を「中ゴロノ栖」と比べるという意味ではなくして、「中頃の栖(鴨川近くの家)が、ありし昔の祖母の家の十分の一であったのに比較してみれば」という意味として理解できるのではないか。それ故、「又百分ガ一ニ及バズ」は、「是(方丈の家)は『又』即ち『さらに』、『アリン住マヒ』即ち『祖母の家』の『百分ガ一』にも及ばない」という意味に解せるのではなからうか。

通して訳せば、「この方丈の庵を、中頃住んだ鴨川河畔の家が、昔の祖母の家の十分の一であったのと比べれば、またさらに小さくなって、祖母の家の百分の一にも及ばないことだ。」となるであろう。

つまり、鴨長明は、あくまで「祖母の家」を比較の根本に据えているのであって、「中ゴロノ栖」は、「祖母の家」と「方丈の庵」を比較するための、中間的な物差しに過ぎないのではなからうか。

それ故、「祖母の家」に対して、「中ゴロノ栖」は、「十分ガ一」であり、同じく「祖母の家」に対して、「方丈の庵」は「又百分ガ一ニ及バズ。」となるのではないか。即ち、「是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、」と言った時に、実際には、「中ゴロノ栖」だけでなく、その隣に「祖母の家」が並んで置かれていることが当然の前提とされているのではないかと考える。

あるいは、鴨長明は、「是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又十分ガ一二及バズ。」と書くべきであったころを、「十分ガ一」では、先の「是ヲアリン住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。」の「十分ガ一也」と区別が付かないと考えて、「百分ガ一」と表記したことも考えられなくはない。つまり、数学的には、「十分ガ一」にさらに「又十分

ガ一二及バズ」ということで、併せて「百分ガ一二及バズ」となるところであったが、漸層法的描写に拠れば、「是ヲアリン住マヒニ比ブルニ、十分ガ一也。」に対して、「是ヲ中ゴロノ栖ニ比ブレバ、又十分ガ一二及バズ。」と書いたのでは、表現として不十分だと思っただのかも知れない。「十分ガ一」に対しては「百分ガ一」であるべきだと考えた可能性もあり得よう。

いずれにしても、「百分ガ一二及バズ。」は、神田秀夫氏が説かれたように、「方丈の庵」が「祖母の家」の「百分ガ一二及バズ。」であることを、客観的には、示すものであろう。

そのことは、鴨長明が家の大きさにこだわっていたことと合わせ考えれば、神田秀夫氏が、

その「祖母の家」に執念が残っているものだから、「百分ガ一」と、つい、書いてしまったのだろう。

と述べられた如く、失われた「祖母の家」への長明の執念をやはり読み取るべきかも知れない。

しかし、これは、「つい、書いてしまった」とものというよりも、数字と、文章の幾何学的構成にこだわった鴨長明が、修辞技巧等を十分に計算して、書くべくして書いた可能性も否定できないのである。

注

(1) 引用は、新日本古典文学大系本『方丈記・徒然草』(佐竹昭広・久保田純氏校注、岩波書店)に拠る。

(2) 引用は、『解釈と鑑賞』昭和三十九年十月号に拠る。

(3) 引用は、『方丈記全注釈』(籙瀬一雄著、角川書店)に拠る。

- (4) 本稿において、『方丈記』の本文の引用に使用した新日本古典文学大系本『方丈記・徒然草』は、大福光寺本を底本にしている。流布本に見られる数値は省かれている。流布本に拠れば、例えば、元暦二年の大地震の記述として、「或る武者のひとり子の六七ばかり」「二つの目など、一寸ばかりつつうち出だされたるを」等の例が加わることになるが、これが鴨長明の書いたかどうか明確な証拠がないので、今は除いておく。
- (5) 「四五両月」の「両月」の用例を「二」の用例数に加えれば、「二」の計は五となる。
- (6) 大福光寺本・前田家本・三条西家本は「数十」、竜山本や平家物語は「数百」、それ以外は、「数千」とし、恐らく、「数千」の方が数値としては正しいのではないかと思われるが、本稿は新日本古典文学大系本を基準として、作業したので、暫く、「数十」の本文に拠る。
- (7) 引用は、新潮日本古典集成『方丈記・発心集』（三木紀人氏著、新潮社）に拠る。
- (8) 築瀬一雄氏『方丈記全注釈』・『方丈記解釈大成』、武田孝氏『方丈記解釈法』等。